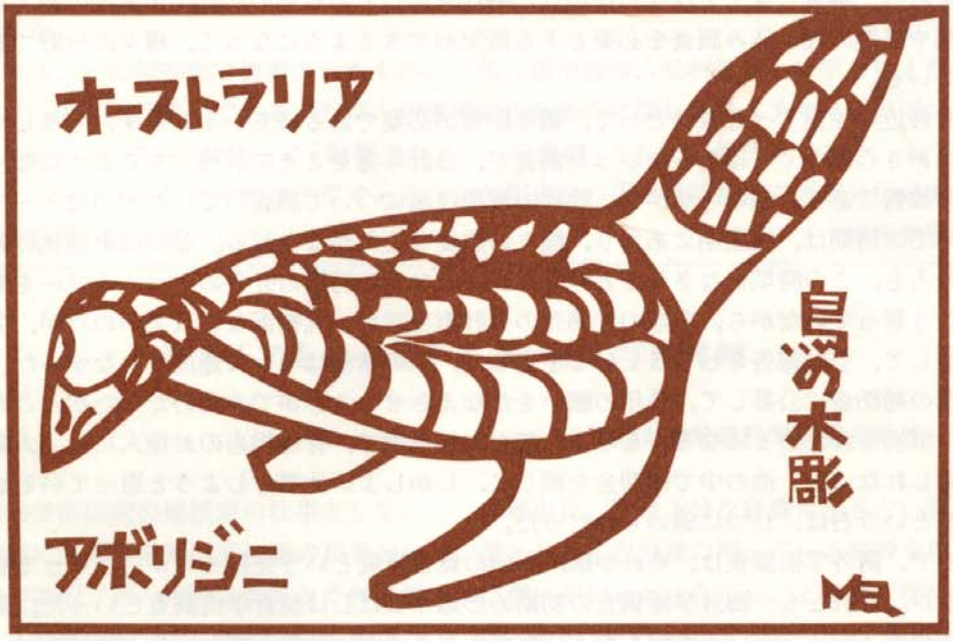
文部省科学研究費・国際学術研究

海外学術調査ニュースレター

NO.22



【目　次】

●ひとつの提案……谷　泰
●旧ソ連・東欧の学術研究体制調査のための派遣―報告―
〈シベリアを中心とした旧ソ連の学術体制〉……福田正己　1
〈エストニアの学術体制〉……松村一登　11
〈旧東ドイツの大学町から〉……佐久間敬喜　18
●ロシア国内の航空機利用上の留意点……福田正己　25
●ネパールの Restricted Area 事情……鈴木三男　27
●国際学術研究採択課題（継続課題分・学術調査）
●〈連載〉調査こぼればなし（27）：カナダ北方大平原で想う事
……末田達彦　34
（28）：依蘭紀行……細谷良夫　35

（表紙デザイン・カット：田主　誠）

国際学術研究総括班

1992年9月

エストニアの学術体制

東京外国語大学 AA 研助教授　松　村　一　登

伊東先生と福田先生の非常にスケールの大きなお話とは対照的に，私はこまごまとしたお話をさせていただこうと思います。人文系の研究者は，どちらかというと，単身で現地で行って，図書館や文書館を訪問したり，あるいはインフォーマントを呼んで個別に調査をすることが多いわけですが，機材を1トン持ち込むなどという問題が起こらない分だけ気楽で，その分，現地の細々とした面が見られたりします。

今回の出張（2月16日～3月8日）では，バルト3国間を結ぶ飛行機が運行していないなどの事情があって日程的なやりくりがつかず，ラトビアとリトアニアは割愛して，エストニアだけで満足することにしました。現地では，研究所・文書館・博物館を合わせて6つ訪ねて，館長さんや所長さんなどの責任者，あるいはそれに準じる方にお会いして，直接お話を伺ってきました。なお，ストックホルム大学バルト研究センター（Centrum för Baltiska Studier）とフィンランドの内国語研究センター（Kotimaisten kielten tutkimuskeskus）も訪問したのですが，今日のお話はエストニアのことに限らせていただきます。

まず，エストニアの国内事情について一般的なことを申しますと，私が行った2月中旬は，人民戦線活動家のサビサール（Edgar Savisaar）が，1月下旬に，1990年の春からずっとやっていた首相の座をおりた後，新しくティート・ヴァヒ（Tiit Vähi）という，どちらかと言うと実務型の首相の新内閣が成立したばかりの時期です。また，2月24日には，独立回復後初めての独立記念日の祝典が催されました【エストニアはいつ独立したのかという質問を多くの人から受けますが，エストニア政府の公式見解は，1918年2月24日に独立を宣言した旧エストニア共和国が，ソビエト軍による半世紀にわたる占領時代の終わった昨年8月，独立を回復したとします。したがって，独立記念日は，新共和国が成立した日ではなく，旧共和国が独立を宣言した日となります】。そういう意味で，たいへん面白い時期に出かけたことになります。

昨年夏の独立回復以来，エストニアでは，独立国としての実体を整える作業が着々と進んでいます。ちょうど私のタリン滞在中，国籍法の適用規則が議会を通りました。もっとも，現在のエストニア議会（最高会議；Ülemnõukogu）が果たして議会と呼べるものであるかに関しては，賛否両論が渦巻いています。たとえば，この時，旧ソ連軍選出の議員4人がまだ居座っていて，ちゃんと議決権を行使していたという驚くべき事実があり，エストニアは形式的には独立したけれども，現実にはまだ独立国とはいえないという声も聞かれましたが，とにかく国籍法の適用規則が議会を通りました。帰国後調べてみたところ，国籍法のことを報道した日本の新聞は，どうやら朝日新聞だけのようです。

また，国籍に関する法律が整ったので，次の段階として，2か月くらいの間にエストニア国籍をもつ人の名簿を作るということになりました。これは，近い将来に行われる新しい議会（Riigikogu）の選挙のための選挙人名簿になります。ところで，この名簿作りは，おそらく6月ころだろうと噂されている新通貨クローン（kroon）——スカンジナビア諸国の通貨クローネと同じ系統の語ですが——の導入の準備とも関わってきます。というのは，ルーブルを新しいお金に交換する場合，交換する権利があるのは誰かということを明確に規定する必要があるからです。それで，今月の初めから，全国に700余りの通貨交換所というのが設けられ，そこに大体2000人から3000人くらいの規模の名簿があるのですが，最寄りの通貨交換所へ行って，自分の名前がちゃんと名簿に載っているかどうか確認することになりました。この名簿には，大人だけでなく，子供も赤ん坊も全部ふくまれているそうです。この名簿確認の期間は3週間ほどで，もうすぐ終わるはずです。はたしてこの手続きが問題なく完了するかどうかは別として，とにかくこういうことが行われています。

選挙人名簿ができますと，今度は総選挙です。この総選挙が行われて初めて，ソビエト時代からの遺物でない正真正銘のエストニア議会が出来ることになります。そして，すでに出来上がっている憲法草案を国民投票にかけるという段取りになっていると聞いています。現在，エストニアは，具体的な形で国の体制を整えつつある段階にあるわけです【《補足》を参照】。

このような動きと並行して，最近入った情報では，科学アカデミーで大きな改革が行われつつあるようです。エストニアの場合，これまで学術研究に関係してきた主な省庁は少なくとも3つあります。1つは，教育省で，小学校から大学までの教育を担当しています。第2は文

化省です。この省の性格はよくわからないのですが，博物館や美術館，あるいは劇場，コンサートホールのような芸術活動，文化活動の場を管轄する省庁のようです。一度電話をかけてみたことがありますが，演劇関係者が出て，学校や言語法のことは他で聞いてくれといわれました。3つ目はエストニア科学アカデミーです。これは，ここ数年，モスクワとのつながりが事実上切れた状態で運営されていたのですが，独立国になって，財政難がいっそう深刻になっています。

エストニアにとって，他のバルト諸国でも同じだと思いますが，科学アカデミーというのはソビエト体制を象徴する機構です。一方，エストニア固有のものとしては，17世紀から，途中一時中断はありましたが，旧共和国時代・ソビエト時代を通じてずっと続いているタルト大学という総合大学があり，民族運動家を含むエストニアの知識人は，みんなこの大学で育ったという背景があります。ソビエト時代になってからは，タルトに大学，タリンに科学アカデミーという構図がずっと続いてきました。2週間ほど前のエストニアの新聞に，この構図が崩れつつあることを示す事件が2つ載っていました。

まず，5月6日の新聞によると，大学と科学アカデミーの組織の統合をめざす具体的な動きが出てきたようです。自然科学の分野の研究領域の名称をよく知りませんので，研究所の名前などが正しくお伝えできるかどうか自信がありませんが，科学アカデミーの宇宙物理学・大気圏物理学研究所とタルト大学が，双方に共通の教授職を設けることに合意したそうです。新しく作られるのは，宇宙論と生物地殻物理学の教授職で，これを科学アカデミーの研究所と大学の併任ポストとする協定が調印されたようです。

その記事の中で面白いのは，科学アカデミーの会長が，「この協定により，大学と科学アカデミーの事実上の統合にむけてゴーサインが出た。研究面においても設備面においても，科学アカデミーの協力によって，大学はいっそう強固なものとなり，また，半世紀の間に蓄積された不公正は是正されるだろう」と言っていることです。つまり，ソビエト時代には，科学アカデミーの方にはモスクワからお金が来ていたのに対し，大学の方はどちらかと言うとのけ者にされていたわけですが，これは不公平だったから，これからは協力体制をとろうと言っているわけです。

もうひとつ，注目していいのは，この協定が単なる宣言ではなく，双方の権利と義務を具体的に規定している点で，例えば科学アカデミーが所有している施設をどんなふうに共同利用するかも明確に定めているようです。

科学アカデミーと大学の協力体制へ向けての動きは，このように，理科系の研究分野の方がやや先行しているようです。理科系の分野では，これまでのような大学と科学アカデミーの2本立ての体制がくずれていくことは間違いなさそうです。

社会科学系の分野では，イデオロギーが関わってくるだけに，特有な問題があります。このことと関連して，5月5日の新聞にあった，今年の秋，タルト大学に社会学部が新設されるという記事に注目したいと思います。この学部は，政治学，社会学，経済学，経営学，文化人類学など，幅広い研究領域を含む学部になるようです。

この改革で興味深い点は，最初の年に講義を担当する教官が，全員外国在住のエストニア人でしめられることです。今年の秋学期の教官を見てみると，カリフォルニア大学教授で社会学のレイン・ターケペラ（Rein Taagepera）が，講義を担当するほか学部長もつとめ，カリフォルニア大学でエストニアの民族主義を扱った学位論文で政治学の博士号を取ったばかりの若手の政治学者が1人と，州立ポートランド大学から経営学と経済学の教授が1人ずつ——この2人は夫婦のようですが——タルトにやってきます。彼らのうち，本務校での講義がある者は1学期だけで帰国するので，代わりに，春学期には，スウェーデンのエーテボリ大学から経済学の教授がやってくるほか，インディアナ大学からも1人来るそうです。いずれもエストニア人です。半年だけの担当になる人がほとんですが，とにかく講義が全部「外国人」の教授陣にまかされることになります。

この社会学部は，学部に1年生を受け入れるほかに，修士課程——定員は10人だそうです——を設けます。修士課程の最初の任務は，これまでタルト大学で社会科学系の学科を教えてきた教官たちを入学させ，再教育することのようです。この再教育を受ける教官たちは，1年間で一通りのコースを終え，次の年度からは自ら学部1年生の講義を担当することになっているらしいので，修士課程の授業は決して楽ではなさそうです。将来的には，再教育を受けた現在の教師陣と，新しくこの学部を巣立つ人材とで，タルト大学の政治学，経済学，社会学などの教官がすべてまかなえるようにすることを目指すとしています。

この学部で具体的にどんな授業が行われるかを見てみますと，たとえば「ミクロ経済学」「統計学的方法」「社会科学のための英語」などの講義名があって，なんだかアメリカの大学へ行ったような錯覚に陥ります。英語で行われる講義もかなりたくさんあるようで，「コンピューター入門」「経済学概論」「民主主義の基礎」「比較政治学」

「政治地理学」などがそうです。

私たちがびっくりするような大学改革が行える背景には，エストニア人の場合——ラトビア人やリトアニア人の場合も基本的に同じですが——，全世界で約100万人いるエストニア人の約1割が外国に住んでいるという事情があります。ソビエト体制を嫌って西側諸国に大量に亡命した人々の中には，インテリ層が多かったので，海外のエストニア人のなかに大学の先生などがかなりいて，人材には事欠かないわけです。

これからエストニアといろいろな共同研究を行っていこうとする場合には，今述べましたような2つの動き，すなわち，大学と科学アカデミーの協力体制の成立と大学のカリキュラム改革という2つの動きを見逃さないようにすべきだと思います。また，エストニアには，名前は忘れてしまいましたが，世界的に見てもレベルの高い研究をしてきた物理学系の研究所があるそうですので，理科系の方々も，こういった動きに目を向けられると，どんどん面白くなっていくのではないだろうかと思います。

さて，一般的なお話はこのくらいにして，今回のエストニア訪問中に私が訪ねた6つの研究所，文書館，博物館のお話しに移ろうかと思います。これらの機関の名称や所在地等を表の形にまとめておきました。私の個人的な関心にもとづいて選んだために，人文・社会系の研究機関ばかりになってしまいましたが，歴史学やそれに関連する分野の研究者の方にはたいへん興味深い資料のある研究機関が含まれています。

〈表〉訪問したエストニアの文書館，博物館，研究所

① 所在地；② 所長(館長)；③ 電話等；④ 旧名称；⑤ カタログ，出版物など

〈タリン市〉

1．Tallinna Linnaarhiiv（タリン市文書館）
① Tolli 4, EE0001 Tallinn, Estonia
② Jüri Kivimäe
③ tel./fax. (+7-0142-)601744
④ Tallinna Riiklik Keskarhiiv
⑤ G. Hannsen, Tallinna linna arhiivi kataloog/Katalog des Revaler Stadtarchivs, Reval 1924.
Eesti NSV Tallinna Riikliku Keskarhiivi arhiivifondide lühiteadmik, 1257—1975, Tallinn, 1976.

2．Eesti Riigiarhiiv（エストニア国立公文書館）
① Maneežī 4, EE0107 Tallinn, Estonia
② Heino Valmsen
③ tel. (+7-0142-)441118
④ Eesti NSV Oktoobrirevolutsiooni ja Sotsialistliku Ülesehituse Riiklik Keskarhiiv（エストニア・ソビエト社会主義共和国十月革命・社会主義建設中央文書館）

3．Eesti Teaduste Akadeemia Ajaloo Instituut（エストニア科学アカデミー歴史研究所）
① Rüütli 6, EE0101 Tallinn, Estonia
② Raue Juursoo（研究主任，teadussekretar）
③ tel. (+7-0142-)445993
⑤ Eesti Teaduste Akadeemia Toimetised. Ühiskonnateadused.
/Izvestija Akademii Nauk Estonii. Obščestvennye nauki.
/Proceedings of the Estonian Academy of Sciences. Social Sciences./

〈タルト市〉

4．Eesti Ajaloo Arhiiv（エストニア歴史文書館）
① J. Liivi 4, EE2400 Tartu, Estonia
② Endel Kuusik
③ tel. (+7-0142-)32482, 33337
④ Eesti Riigi Keskarhiiv (1921～)
Eesti NSV Riiklik Ajaloo Keskarhiiv (1948～)
⑤ Eestimaa rootsiaegse kindralkuberneri arhiivi kataloog/Katalog des estländischen Generalgouverneursarchivs aus der schwedischen Zeit. Tartu: Eesti Riigi Keskarhiiv, 1935-36.
Central'nyj gosudarstvennyj istoričeskij arxiv Estonskoj SSR. Moskva-Tartu, 1969.

5．Eesti Rahva Muuseum（エストニア民族博物館）
① Veski 32, EE2400 Tartu, Estonia
② Tõnis Lukas
③ tel. (+7-0142-)32254, 34279, 33483, 34784
④ Eesti NSV Riiklik Etnograafia Muuseum
⑤ Eesti Rahva Muuseumi aastaraamat

6．Eesti TA Fr. R. Kreutzwaldi nimeline Kirjandus-

muuseum（エストニア科学アカデミー・クロイツヴァルト文学博物館）

① Vanemuise 42, EE2400 Tartu, Estonia

② Peter Olesk

③ tel.（+7-0142-）30035

⑤ Fr. R. Kreutzwaldi nimeline Kirjandusmuuseum. Teadmik. Tallinn: Eesti Raamat, 1982.

Juurtega sajandite mullas. Kogumik F. R. Kreutzwaldi nim. Kirjandusmuuseumi 50. aastapäevaks. Tallinn: Eesti Raamat, 1990.

これらの6つの研究機関の管轄先を調べてみますと，3つに分類できます。まず，政府直属の機関である公文書館局（Arhiiviamet）の下にあるのが，表の1のタリン市文書館，2のエストニア国立公文書館，4のエストニア歴史文書館の3つです。現在，エストニアでは財産所有に関する法律が改正されて，今まで国有財産だった農地・宅地などを，旧所有者に返還するという作業が進行中で，土地台帳を調べてほしいという問い合わせが殺到し，これらの文書館はその作業に追われて本来の機能を果たせない状態にあるそうですが，機構改革という点では，これらの機関がいちばん進んでいるという印象をうけました。

2番目のグループは，科学アカデミーに属する機関で，3の歴史研究所と6の文学博物館がここに含まれます。今進行中の改革の中でいちばん影響を受けそうなのが，このカテゴリーの機関で，解体とまでは行かないまでも，一部の研究部門の分離独立が起こるなど，大がかりな改組が噂されている研究機関が少なくありません。

最後に残った5のエストニア民族博物館は，文化省の管轄下にあるそうです。つまり，正式には研究機関とは見なされておらず，最初の2つのカテゴリーに比べて，ステータスが1段階低いといえます。

このような管轄関係は，これまでほとんどわからなかったのですが，ソビエト体制の崩壊とともにしだいに透明なものになりつつあります。

人文系や社会科学系の研究者でソ連に関わってきた者なら誰でも，少なくとも薄々は感じていたことですが，これまで文書館と言いますと，なんとなくKGBのにおいがして，あまり近づきたい場所ではありませんでした。科学アカデミー自体にもそういう気配が漂っていて，研究所等にはどことなく気楽に立ち寄れない雰囲気があったものですが，最近は様子がガラッとかわり，そういったことを気にせずに訪ねて行けるようになりました。研究機関の責任者の応対の仕方もずいぶんと変わりましたので，今回は訪問が結構楽しかったのですが，なにしろ，ちょうどエネルギー危機で暖房が満足にできない時期で，建物の中がとても寒くて，コートを着ていられる屋外の方がかえって暖かいくらいでしたから，座って1時間も話をしていると，体を動かしたい気持ちになり，訪問を適当な時間で切り上げることが苦もなくできました。

6つの機関のなかで，個人的にいちばん楽しかったのが，タリン市文書館の訪問です。この文書館は1883年に今のような形になったものだそうですが，ここにある15～16世紀の文書は，一都市の古文書館としては，東ヨーロッパでもまれな規模をほこるもので，当時のタリンの都市生活のあらゆる面に関する資料はもちろん，ノブゴロド，フィンランドの都市，ドイツのハンザ都市の研究にも貴重な資料を提供してくれるそうです。文書は大部分が低地ドイツ語で書かれているので，バルト地域の中世低地ドイツ語の研究のための格好のコーパスになるはずです。また，現存する最古の印刷されたエストニア語のテキスト（Wanradti ja Koelli katekismus, 1535）の断片の実物も見せていただきました。館長のキビマエさんは40歳前後の若い人で，ハンザ時代のナルバ（Narva）市――東北エストニア，すなわち比較的ペテルスブルクに近いところにある町――の歴史が専門だそうです。

日本では知られていないと思いますが，タリン市文書館の文書は，その半分くらいが，第2次大戦の終りころドイツ軍に持ち去られ，ドイツのコブレンツにある連邦公文書館（Bundesarchiv）にずっと保管されていました。それが1990年10月に全部まとめてドイツ側からタリン市に返還されました。返還にあたって，ドイツ側は，ゼロックスなのかマイクロフィルムなのか知りませんが，すべての文書のコピーを作ったそうです。その後，ドイツ側とタリン市の間で結ばれた協定で，ドイツに持ち去られずにエストニアにずっと保存されていた分についても，エストニア側がゼロックスコピーを作成してドイツに寄贈することになり，現在その作業が行われているそうです。館長さんに連れられて，コピー室を見学したのですが，寒い部屋にやや旧式のコピー機が3台くらいありまして，何人で作業をしているのかは聞きませんでしたが，いつまでかかることやら，という印象を受けました。

文科系の研究者の場合，コピーを取ることがたいへん多いわけですが，エストニアでは，運良くコピー機があ

っても，トナーがない，紙がないということがめずらしくありませんので，いらっしゃる際には，万一にそなえて，コピー機の他に，トナーと紙を持参することをお勧めします。

館長さんに，マイクロフィルム化の計画はあるのかと聞きましたところ，何でもスウェーデンの方から援助がくることになっているという話でしたが，これも長期的な話だろうと思います。

カタログは，2つあるようです。1つは1920年代に出たエストニア語とドイツ語で書かれたカタログで，俗に「ハンセンのカタログ」と呼ばれているそうです。この文書館に保存されている文書は非常に古いものが多いので，歴史的に重要な文書はこのカタログにほぼ網羅されているとのことです。ハンセンのカタログのリプリント版の出版はできないかと聞いてみたのですが，財政的理由ですぐには難しいとのことでした。また，いくつかの文書のファクシミリ版を販売したら財政的にも潤うのではないかと聞くと，これも技術的な問題があってすぐにはむずかしいとのことでしたが，出版事業がまったく計画されていないというのでもないようです。

もうひとつのカタログは，1970年代になって出された比較的簡単なもので，これは現物を1部いただいてきました。たいへん面白いことに，全部エストニア語で書かれています。なぜこんなことが面白いのかというと，ソビエト時代のエストニア語の出版物は，すべて，奥付の一部がロシア語になっているのですが，それがこの本にはなく，100%エストニア語の出版物なのです。よくみますと，内部資料という意味のことが書いてありまして，No.177という番号が書き込んであります。何部くらい刷られたものかわかりませんが，このような資料が作られていたのだということを初めて知りました。

この文書館に外国から研究者がやってきたことがあるかと聞いてみましたが，外国からの訪問者はほとんど見学者で，腰を落ちつけて滞在して研究した人はまだいないとのことです。不幸にして比較的知られていなかった文書館ですが，歴史の研究者には未開拓の分野として興味をそそるのではないかと思います。

ここで，参考までに，政府の直接管理している4つの文書館，すなわち，タリン市文書館，エストニア国立公文書館，エストニア歴史文書館，共産党文書館について，その役割分担を見ておきます。まず，タリン市文書館は，タリン市のもの，それも19世紀以前の古いものが中心です。タリン市以外の文書，それも古いものを中心においてあるのがタルトにあるエストニア歴史文書館です。タリンのエストニア国立公文書館には，1918年以降の文書が納められており，共産党文書館はエストニア共産党中央委員会の文書がそのまま寄贈されたものです。このほかKGBの文書も党中央委員会の文書と同じような扱いを受けているはずですが，こちらの方は，大部分エストニア国外へ持ち去られている可能性が高く，大したものは残っていないのではないか，と言われました。私も「彼ら」と10年以上つき合いましたので，自分についてどんな報告がされていたのか，興味津々といったところですが。

さて，2のエストニア国立公文書館は，旧共和国時代(1918～1940)以降の文書を納めてあるところですので，いろいろな分野の方に面白い文書館だろうと思います。この文書館のソビエト時代の名前は，「エストニア・ソビエト社会主義共和国10月革命及び社会主義建設中央文書館」という大げさなものでした。これは，旧共和国時代からの国立公文書館に，ソビエト政権がどこかにロシア語の決まった名前があったのを天下り式に翻訳してつけたものらしく，ソ連のあちこちの共和国で同じような名前の文書館が作られたそうです。

国立公文書館は，ソビエト時代にも重要な機関でしたから，主要な文書はほとんどマイクロフィルムにおさめられて，どこか別の場所に保管されているそうです。この意味では，今回訪問した機関のなかで，いちばん恵まれたところのようです。外交文書もここにあるはずですが，見せてはもらえませんでした。

3つめのエストニア科学アカデミー歴史研究所は，アカデミー改革のなかでいちばん影響をうけそうな研究所です。この研究所の部門のうち，イデオロギーとは比較的距離をおいて着実な成果をあげてきた考古学部門を分離独立させる動きがあるという噂を聞きました。研究所にはこのほか，中世史，近世史(19世紀以降)，文化史(学校教育，芸術など)，民族学，バルト海沿岸地域の国々の歴史の研究者がいて，研究員は全部で70人～80人とのことです。

この研究所は，今年の夏にスウェーデンから専門家の使節団を呼んで，勤務評定のようなものを受けることになっていて，その結果如何で，どのような改革のメスが入るかが決まるそうです。

この研究所とタルト大学の社会科学関係の学部との関係は微妙で，大学側は科学アカデミーの研究所を軒並み潰してしまいたかったらしいのですが，科学アカデミーの社会科学の部門が何らかの形で継続されるのはほぼ間違いなさそうです。ストックホルム大学のバルト研究センターを訪ねたときにもロイト所長（Aleksander Loit, エストニア人）に同じ質問をしたのですが，やはり「残

るだろう」と言っていました。

ちなみに，歴史研究所と似たような運命にあるのが，私がいつもやっかいになっている科学アカデミー言語文学研究所です。もっともここは，しばらく前から開店休業の状態に近い部門もありましたが。言語文学研究所は，おそらく，言語教育センター的な性格の部門，つまり，ロシア人にエストニア語を教える機関を含むような形に改組されるのではないだろうかと噂されています。なお，フォークロア部門の研究者は，早々にタルトに引き上げたとも聞きました。

1から3までの文書館，研究所はすべてタリンにあるものです。行政の中心であるタリンでは，学術研究も科学アカデミー中心といっていいのですが，タルトに行きますと，大学を含めて，旧共和国時代からの伝統が残っています。今回は，時間の関係もあって，いつも行く大学の代わりに，大学以外の施設を3つ訪問しました。

まず，4のエストニア歴史文書館。タリン市の文書がタリン市文書館におさめられているのに対して，それ以外の地域の古い文書，たとえば土地台帳とか，教区ごとの住民台帳とか，そういったものはほとんどこの歴史文書館にあります。ここでは，館長さんがまず館内をあちこち案内してくれ，土地台帳に添えられた古い地図とか，鑞で封印された領主の手紙というようなものまで見せてくれました。

歴史文書館の総合的なカタログとしては，1969年に出されたロシア語のガイドブックをいただいてきました。この文書館の文書は，ロシア語のものがそれほど多くないので，本格的な研究をする人にはこの本だけでは物足りないと思います。また，スウェーデン時代のものに関しては，旧独立時代に作られたドイツ語とエストニア語のカタログがあり，これもいただいてきました。

5のエストニア民族博物館（Eesti Rahva Muuseum）は，文化省の管轄で，公式の位置づけとしては，研究機関というよりは，展示物がおいてある博物館という扱いの施設だそうです。つい2週間ほど前に選挙で選ばれたばかりという若い館長さんは，研究機関に昇格させることが目標の1つだと語っていました。

この博物館は，農具や衣類からビールのジョッキまで，およそエストニア人の生活と関係ある物品ならなんでも，大量に集められて保管室におさめられていますが，展示のためのスペースは十分とはいえないようです。今年の夏に，大阪の国立民族学博物館の庄司博史さんがエストニアに買い付けに行くそうですが，この博物館からもかなり購入してくるのではないかと思われます。この博物館は，ソビエト時代には民族学博物館（Etnograafia Muuseum）と呼ばれていましたが，紀要（aastaraamat）が継続的に出ていて，私の研究室にも揃えてあります。

最後に残った6番目の科学アカデミーの文学博物館は，言語学や文学の研究者にはいちばん面白いところと言えます。私がここを訪問するのはたぶん3度目か4度目です。文学研究を専門とする館長さんは，タルト大学でも講義を担当しています。文学博物館と言うと，日本人の私たちは，有名な作家の遺稿などが展示してある場所のようなイメージを抱きがちですが，展示のためのスペースはほとんどなく，むしろ文学研究所と呼んだほうがぴったりする機関です。旧独立時代のエストニア語の新聞などを一通り揃えた図書館があり，エストニア語の出版物や，エストニアに関する出版物のカード化も行われています。

もともとフォークロアの研究は，大学のあるタルトで行われていたのですが，科学アカデミーがタリンに出来ると，タリンの言語文学研究所にフォークロア部門が作られ，フォークロア研究の中心がタルトからタリンに無理に移された格好になっていました。最近は，タリンとタルトの力関係がフォークロア研究に関する限り逆転して，再びタルトがフォークロア研究を一手に引き受ける体制になったようです。ここのフォークロア部門には，エストニアのものだけでなく，ロシアやシベリア地域で話されている他のフィン・ウゴル諸語に関する文献や録音資料などもあります。

文学博物館には，この他に，エストニア人の作家の手書きの原稿とか，野外調査のときの日記，あるいは，作家が出演したラジオ番組の録音などを収集する部門があり，手稿部門と呼ばれています。今回の訪問の最大の収穫といえば，19世紀後半にエストニア語やボルガ諸語の研究ですぐれた業績をあげたヴィーデマン（F. J. Wiedemann）が，約30年にわたり，毎年夏行ったボルガ川中流域でのフィールドワークの記録としてドイツ語で書き残した旅行記をタイプ転写したもののコピーを，個人的に事実上無期限で拝借してきたことでしょうか。

この博物館がある建物は，たいへん古く，保管室にはいかにも頼りなさそうな防災設備があるだけです。フォークロア関係の資料の中には，手書きのまま百年以上も保管されているものがあって，それこそ火事になったら一瞬にして消えてしまう危険があります。先ほどの歴史文書館も似たような状態で，百何十年も前の文書でも保管場所が足りなくなると廊下に設置した書架に並べてありました。もっとも，防災設備のことを話題にするのは，なんだかわざと意地悪な質問をするような気がしましたので，黙っていましたが。

全体として振り返って見ると，今回の訪問では，学術研究体制のさまざまな問題点も明らかになりましたが，独立国家になって以前よりよくなった面もいろいろと見ることができて，有意義だったと思います。

日本の場合，バルト3国と言ってもあまり身近な存在ではありませんので，日本の研究者がバルト3国の研究者と具体的にどんな共同研究ができるのだろうかという形に問題設定したところで，あまり人々の関心をひきません。しかし，たとえば，アメリカ合衆国の場合，バルト3国からの移民が多くいる関係で，研究者の対応がすばやく，すでに「バルト学術センター」(Baltic Academic Center）という社会科学系の研究センターがラトビアのリガに設立され，アメリカから派遣された研究者が3人くらい常駐していまして，政治とか経済の研究者向けですけれども，情報の提供もしてくれます。日本の場合は，あまりこれぞといった利害が関係してきませんので，アメリカに比べると，研究者の対応が遅いなという感じを受けます。

最後に，エストニアにおける日本研究について簡単にふれますと，翻訳家が2～3人といった程度と申し上げておきます。いずれもレニングラード(現ペテルブルク)やモスクワの大学で日本語を学んだ人たちです。タルト大学でも一時期日本語が教えられていたことがありますが，教えていたのは中国語が専門の人で，日本語はかたことしか話しませんでした。タルト大学で勉強した中で日本語が一番できるようになった人は，英語学科の先生になりましたが，現在は，アメリカのインディアナ大学でエストニア語を教えているそうです。全般的に言って，エストニアの日本研究はまだこれからと言ったところです。

《補足》

この報告の日（1992年5月19日）以後のエストニアの主な出来事は次の通り。

6月20日　新通貨「クローン」の導入（1クローン＝1/8ドイツ・マルク)。

6月28日　新憲法が国民投票により採択される。

9月20日　議会選挙，大統領選挙

10月5日　決選投票で，L・メリ氏が大統領に選出される。

(1992年10月8日記)